2026.10.02

令和８年度　長崎県考古学会総会の事例報告の概要

9 月 19 日（土）に今年度の長崎県考古学会総会が長崎大学で開催されました。50 名ほどの参加があり、盛況でした。運営にあたられた事務局の皆様に改めて感謝申し上げます。

ここでは事例報告を簡潔にお伝えいたします。

なお、本記録は総会資料と筆者のメモをもとに作成しておりますので、内容に誤りがあったり、誤解がある可能性があります。引用などはお控えください。

会場の様子

●南島原市見岳（みだけ）地区の石器文化―養台寺跡（ようたいじあと）と新堂原（しんどうばる）遺跡の発掘調査成果から―

報告：本多和典（南島原市教委文化財課）

・養台寺跡

既に報告書は刊行済です。

注目されるのは旧石器時代のまとまった石器群で、南島原市内で旧石器時代の文化層が初めて確認された遺跡です。出土品では今峠型ナイフ形石器が出土していることが特筆されます。同石器は島原半島では類例が極めて少ない石器です。

さらに縄文時代早期の連結土坑（＝連穴土坑、煙道付炉穴）4 基が検出されています。2000 年に刊行された『西海考古』第 2 号で雲仙市教委の辻田直人氏が諫早市鷹野遺跡、江迎町（現佐世保市）広久保遺跡の２遺跡を集成されていましたが、その後、県内の同遺構の集成はされていません。

弥生前期の遺物も出土しています。発掘調査報告書に掲載された土器を見る限り、板付式系土器が当地に入る前の土器群のようです。

・新堂原遺跡

遺構としては弥生時代の大型の松菊里型住居が廃絶した後に石器製作時に発生した残滓を廃棄して再利用した大型土坑が発見されました。時期は弥生時代前期です。石器の石材としてサヌカイトが黒曜石を上回っていることが、島原半島における縄文晩期、弥生早期期の遺跡の様相とは大きく異なるそうです。

その他に炭化ドングリ（ほとんどがイチガシ）が出土しています。

●原の辻遺跡 471 地点　発掘調査成果について

報告：立石 徹（壱岐市役所文化スポーツ振興課）

・調査地は居住域である丘陵の東側の低地に立地します。調査区内に幅 11 ㍍の河道を発見し、その中から２条の環濠を検出しています。外環濠と内環濠があり、調査の結果、隣接する石田高原 372-1 地点で検出した環濠と接続する可能性が高いことが分かりました。環濠内の土器の検討から、弥生時代中期に内環濠が造られ、後期中葉に外環濠が造られ、この時、二重環濠となっていたとのことです。そして弥生時代終末に二重環濠が埋没したことが分かりました。主な遺物は内環濠から銅鏃、丹塗り土器などが出土し、外環濠からは青銅製鋤先や銅鏃が出土しています。出土遺物の総数は 67,000 点以上です。

●重要文化財　聖福寺　大雄宝殿・鐘楼の調査成果

―保存修理工事に伴う地下構造調査概報―

報告：宇土靖之（株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店）

・聖福寺の概要

長崎市玉園町に所在し、延宝 5 年（1677）に開創された黄檗宗の禅宗寺院です。大雄宝殿は元禄 10 年（1697）の建築です。鐘楼は享保元年（1716）の建築で、長崎県下に現存する最古の鐘楼とのことでした。

この大雄宝殿・鐘楼・天王殿・山門は平成 26 年（2014）に重要文化財（建造物）に指定されています。

令和 2 年からは建物の解体・保存修理が進められています。

・鐘楼の調査

ここでは総会資料から鐘楼の調査成果を引用してご紹介します。

「（鐘楼の）建物内部の梵鐘の真下に該当する位置で、8-1 層を直径 1.9mの円形、断面が深さ 0.67mのすり鉢状に掘削し、海砂が充填された土坑が確認された。海砂からカキなど貝類と 18 世紀から 19 世紀と想定される磁器が出土した。土坑の東端は建物の布石や基礎石に接しており、海砂を充填することで建物の基礎が露出した状態で使用されることを防ぐとともに、梵鐘の音響効果を意図した施設であると考えられる。この土坑は「鳴洞（ミョンドン）」

と考えられる（註 1）。」

註 1　李恩和によると、韓国の鐘は「鐘口下の地面に鳴洞という大きな穴を掘るか、あるいは大きな甕を埋め、内側に長い楕円形の空間を共鳴するようにするのである」としている（李 2003）。また、神取龍生氏（愛知県幸田町）から、京都東本願寺の鐘楼の地下には梵鐘の真下に穴が存在しているとの教示を得た。

参考文献

李恩和 2003「広島県所在の鐘について」『藝術研究』（16）　広島芸術学会

●佐世保鎮守府管内における高射砲台の変遷について

報告：川内野篤（佐世保市役所観光課）

・高射砲台とは川内野氏によると「対空砲を備えた砲台」であり、氏の分類によると第一世代から第四世代まであるそうです。

・第一世代

昭和 14 年（1937）の支那事変（日中戦争：筆者註）勃発を契機として佐世保鎮守府周辺における高射砲台の建設が本格化しました。当時の装備は大正時代同様の貧弱なものでした。

・第二世代

昭和 14 年から 18 年にかけてより本格的な高射砲台の整備が行われるようになりました。

・第三世代と第四世代

昭和 19 年から 20 年にかけて、米軍の B29 による攻撃に対抗するために設けられた高射砲台で、装備は異なるものの両者は同時に計画されました。

・B29 による本土空襲と高射砲台の装備の変遷について

佐世保鎮守府管内でもっとも初期に整備され、ドラスティックな変遷をたどった田島岳（弓張岳）高射砲台を中心にその変遷を詳細に述べられました。

氏の報告は詳細でありながら分かりやすく、あたかも大学で講義を聞くような感覚を覚えました。